

## ことばの重さ

米国国務省のメア日本部長が沖縄（日本人）に対する差別的な発言をしたとして、半ば外交問題にまで発展し、メア部長自身更迭されるという事態になったことは皆さんもご承知のことと思います。

東日本大震災が発生したせいでしょうか、メア部長の発言問題が生じてから随分と時間が経ったように感じられますが、実は一カ月も経っていません。

問題の発端は、昨年末、米大学生らに行った講義の中で、「合意重視の和の文化をゆすりの手段に使う」「沖縄は、ごまかしの名人で怠惰」などと発言したというものです。

講義を聞いた学生が作成した「発言録」によって、ことが明らかとなったのですが、偏見に満ちた発言が米国政府のそれも対日政策担当の政府高官からなされたことは、非常に残念であり、遺憾なことだと思います。

こうした舌禍事件は、メア部長発言に限らず、国内においても、政府高官の失言問題など多々あり、その都度大騒ぎになって大臣が首になるといった事態まで生じています。

結局、発言に対する重さへの理解が不足しているといわれても仕方ないでしょう。

オフレコであろうとなかろうと、うっかりであろうとなかろうと、いったん口をついて出た言葉は重いということです。

私達は、古来、言葉には霊的な力が宿っていると信じてきました。すなわち、声に出した言葉は、まわりに対して何らかの影響を与えるということであり、良い言葉を発すれば良いことが起こり、不吉な言葉を発すれば凶事がおこると、信じられているのです。

不誠実に言葉を使えば、その人は、不誠実な人となる、私はそのように思っています。

「政治にしろ、事業にしろ、ことばがすべてであるといっておよい。善政とは、良いことばの政治である。企業においては、ことばを大切にすることが成

功する。」これは、今、読売新聞に連載中の小説「草原の風（宮城谷昌光著）」の一節です。

また、作家池宮彰一郎さんは小説「平家」の中で「人の為出かす事の後始末などというものは、人の力で修復できぬ道理がない。よんどころなき始末となっても、時が解決する。世の中はそういうものである。

だが、言に信を失なうというのは、もう取り返しがつかない。あの者は言を翻す。あるいは姑息に収拾すると見放されたら、もう人は服さなくなる。」と表現しています。

口から発せられる言葉は、自分自身を拘束するものです。同時に、自分の言葉に責任を持つからといって、何をしゃべっても良いということでもありません。

そういう重さが、言葉にはあると思います。 （塾頭 吉田 洋一）